<table>
<tr><td colspan="6">会　　議　　録</td></tr>
<tr><td colspan="2">令和５年度第３回
生活支援事業協議体</td><td>日
時</td><td>令和６年１月３０日（火）
１４時００分～１６時００分</td><td>場
所</td><td>小金井市役所
第二庁舎８階
８０１会議室</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="5">小金井市福祉保健部介護福祉課</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出
席
者</td><td>委　員</td><td colspan="4">委員長　　高良麻子　（法政大学）
副委員長　石塚　勝敏（社会福祉協議会）
委員　　田部井　由美子（社会福祉協議会）
委員　　出川　恵美（介護事業者連絡会）
委員　　濱名　京（地域貢献活動をする者）
委員　　村越　明子（町会・自治会）
第２層コーディネーター
委員　　松村　麻依子（小金井きた地域包括支援センター）
委員　　吉田　栄治（小金井みなみ地域包括支援センター）
委員　　金子　恵子（小金井ひがし地域包括支援センター）
委員　　久野　紀子（小金井にし地域包括支援センター）</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="4">第１層コーディネーター
小金井市介護福祉課　　菊地原　美和
福祉保健部長　　大澤　秀典
高齢福祉担当課長　　平岡　美佐
介護福祉課主査　　濱松　俊彦
介護福祉課包括支援係主任　木津　恵美子</td></tr>
<tr><td colspan="2">傍聴の可否</td><td colspan="2">◎可　・　一部不可　・　不可</td><td>傍聴者数</td><td>０人</td></tr>
<tr><td colspan="3">傍聴不可・一部不可の場合の理由</td><td colspan="3"></td></tr>
</table>

次　　第

１　開会
２　議題
（１）報告事項
①　前回協議体からの進捗等
②　令和５年度第５回から第７回生活支援連絡会報告
③　生活支援コーディネーター活動報告（８月分～１１月分）
④　令和５年度各地域包括支援センター活動報告
（２）検討事項
高齢男性の社会参加の促進について
３　その他
次回協議体の開催予定
４　閉会

１　開会

（事務局）
資料の確認と事務連絡についての説明を行う。

２　議題
（１）報告事項
　①　前回協議体からの進捗等
　②　令和５年度第５回から第７回生活支援連絡会報告
　③　生活支援コーディネーター活動報告（８月分～１１月分）
　④　令和５年度各地域包括支援センター活動報告

（高良委員長）
報告事項①「前回協議体からの進捗等」について事務局から報告をお願いしたい。
（事務局）
①「前回協議体からの進捗等」について資料１を基に説明。
（高良委員長）
続いて②番「令和５年度第５回から第７回生活支援連絡会報告」をお願いしたい。
（事務局）
②「令和５年度第５回から第７回生活支援連絡会報告」について資料２を基に説明。
（高良委員長）
③番「生活支援コーディネーター活動報告」について、事務局から報告をお願いしたい。
（事務局）
③「生活支援コーディネーター活動報告」について資料３を基に説明。
（高良委員長）
次に④番の「令和５年度各地域包括支援センター活動報告」ということで、それぞれ順番に第２層生活支援コーディネーターから報告をいただく。
きた包括の松村委員からお願いしたい。
（松村委員）
きた包括で特に力を入れている第２層協議体について報告する。
今年度は既に１３回開催し、年度末までには１５回開催する予定。このうちほぼ毎月開催している梶野町ないまぜの会は、梶野町会の自主防災組織立ち上げ支援という当初の目標を昨年秋に達成。今年は在留外国人支援や不登校児とその親への支援をしている方、花壇ボランティアをしている方など、他分野からも新たな参加者を得て活動の幅を広げている。
次にさくら体操自主グループリーダーの連絡会を５月、１月に実施。昨年からスタートして、半年に１回の開催が定着してきた印象。
またサロン活動継続支援のための第２層協議体も計３回実施。昨年度末に市内５カ所で活動を展開していたピア・サロンが解散した。そのピア・サロンのうち、きた圏域内で開催されていたサロンについて、包括で早めに協力者探しに動いたことで、何とか活動継続の道筋をつけている。
今年度の新たな取組について２つ報告したい。まず１つは、サービスＣ事業終了者に対する個別ケア会議開催について。私個人として、その会議において、あるいはこの事業の中で生活支援コーディネーターとしての役割をあまり果たせていないと考えており、ずっと課題として感じている。
そのような中で第１クール終了者の中に、終了後、介護保険サービスではなく、イ

ンフォーマルなサービスとして認知症予防のために麻雀を再開したいという希望を伺い、本人の障害を受け入れてくれる麻雀サークルを探しつなぐ支援を行った。本人の了解の下、本人が不在の場でサークルの主催者、家族、関係者による個別ケア会議を開催し、本人が抱えている高次脳機能障害の特徴や本人に対して配慮すべき事柄などを、Ｃ事業を担当した作業療法士からサークル主催者へレクチャーする機会を設けた。今後も機会があれば地域活動の主催者に対し、同様の啓発活動を行い、障害などを抱えた方が安心して参加できるインフォーマルの活動の場を増やしていきたい。

次いで、きた包括で新たにスタートした包括暮らし講座について報告する。この講座はシニアを支える現役世代の方にもっと包括を知ってもらうため、シニア・子供世代の双方に関心がありそうなテーマを選定し講座を行っている。７月には相続・遺言、９月には防災、１月には施設入所をテーマに開催し各回とも盛況。また１月の講座については、第２層協議体で日頃から一緒に活動している現役世代の仲間にも周知をお願いして、参加者３５名中６名が現役世代となった。講座参加者の現役世代の割合は少しずつ増えているが、現役世代の参加者の伸び悩みに対してどこに課題があるのか、引き続き第２層協議体で現役世代の仲間たちに意見を求めながら考えていきたい。

（高良委員長）

梶野町ないまぜの会は第２層協議体の位置づけという理解でよろしいか。

（松村委員）

そのように位置づけしている。

（高良委員長）

サービスＣ事業の利用者の方の地域ケア会議を開始前と終了後に行っているのは、市の主催で行っていると思うが。このサービスＣ事業と生活支援コーディネーターとの連携はどういう形になっているのか教えていただきたい。

（事務局）

基本的にサービスＣ事業の開始前・終了後に地域ケア会議を行っている。特に終了後に関しては短期集中サービスを受けた方の次の活動について、本人の状態を勘案してどのようなサービスにつなげていくのか検討する会議となっている。当然状態がよくならなければ介護保険サービスの利用につなげることもあるが、その方の希望や残存能力等に沿って、何かやりたいことがあればそういったサロンの紹介や、インフォーマルなサービスの紹介を中心に考える。そのようなインフォーマルなサービス等に対応できるように、そのエリアの生活支援コーディネーターと第１層生活支援コーディネーターの菊地原は全ての圏域の地域ケア会議に出るような仕組みを取っている。また、理想としては終了後にその方のニーズに沿ってマッチングしていくのがいいと思うが、そこまでうまくいっている事例は多くはないという実感である。

（高良委員長）

うまくいっていない実感を持っている理由はどういうことがあると考えるのか。

（事務局）

基本的には短期集中サービスは運動中心に行っていく。運動機能を維持していくと、ある程度運動がメインになり、引き続き家で継続して運動をやっていくことが大切になってくる。短期集中サービスが終了した以降も運動機能を維持していくためのマッチング先として、今の段階ではさくら体操に寄りがちになっている。いま、その点を市として課題だと考えている。集まって体操するだけではなくて、今年度から地域のスポーツクラブに協力してもらい、まだ検討段階だが、高齢者向けに使いやすい

時間で、スポーツクラブやマシンジムの活用についてなるべく費用をかけずに有効活用していきたいと考えている。うまくいっていないというのは、今、そういったところの整備ができていない、検討段階であるためである。
（高良委員長）
松村委員から役割を十分に果たせていないと感じているという話だが、今の話を踏まえてどういうことが必要だと考えるのか。
（松村委員）
包括の印象としては、この事業にふさわしい方の選定が非常に難しい。
短期間、本当にまじめに運動に取り組み、それを自分のものとして家でもしっかり行い、終了後も自分のために継続してやろうと理解している方、また体調や体力面についてもぴったりフィットする方を選定することがなかなかできていない、プログラムの内容というより、本人の状態や気持ちの部分で十分な成果が上がらないケースも多々あると感じている。
（高良委員長）
他の市町村でも言われていることで、なかなかサービスＣは使いづらいというところが割と多い。この辺りも含めてまた検討していきながら、結果を個別のことだけではなく、地域づくりに生かすことが非常に重要だと思う。市として今検討していることは、別にサービスＣの利用者だけではなく必要なことだと思うので、検討していきながら、サービスＣの利用者に関して開始前・終了後の地域ケア会議をやるのはとてもいいことだと思う。また、そこまでの労力をそこに全部注ぐほうがいいのかなども含めて、全体像として検討いただきたい。
続いて、次はみなみ包括吉田委員、お願いしたい。
（吉田委員）
高齢化で相談件数の多い貫井住宅団地への関わりを通した実態把握や、支援の取組の１つが４月から包括、自治会、公社のＪＫＫなどと協力して隔月で行っている団地集会所の認知症カフェである。４月の初回から６月、８月、１０月、１２月と隔月で回を重ね、毎回２０名以上の近隣住民が集まり認知症への理解を深めながら高齢者の交流の場が定着しつつある。今後は包括主導の開催から住民主導の場へ時間をかけて移行する段階になっている。また同集会所でのさくら体操の自主活動は、コロナ禍以降団地住民が主となり、継続的な通いの場として定着している。
包括としての実態把握と継続支援をしている団地のごみ出し問題について、住民や自治会役員と複数回２層協議体の場を設けた。エレベーターのない４階５階に住む高齢者の課題を共有し、今後の団地の高齢化の課題について継続して話し合いを続けていく。
次に、通いの場の活動支援の取組としては、圏域内のサロンリーダーの連絡会が四半期ごとに定期開催を重ね、サロン合同企画として市のリハビリ活動事業の利用や、多磨霊園でのホールウオークなどの行事開催により、リーダーからサロン参加者にも交流の機会が拡大し横のつながり強化の取組を進めることが出来た。
サロン連絡会においての男性社会の参加の課題を協議する場づくりについても進めている。また、別の支援としてはボッチャによる通いの場の立ち上げ支援も含めて通いの場の掘り起こしも進めている。
その他情報発信としては、１０月２８日、１２月９日に貫井南けやき公園で行われる地域イベント道草市で、スマホみまもりあいアプリを利用した認知症行方不明者捜索模擬訓練や、スマホサポーター協力によるスマホ相談会を開催した。特にスマホ相

談会では毎回１０名前後の高齢者の相談があり好評であった。
　今回は町会、自治会へ隔月で作成しているみなみ包括ニュースに道草市の事前告知のチラシを折り込み周知した。折り込み作業は道草市にともに参加する地元の小学生６名に協力してもらい作業をしながら、子供たちに高齢者の困り事や相談窓口としての地域包括支援センターの周知を行って、プチ社会見学の場となった。
（高良委員長）
　やはり高齢者のスマホに関しての興味は相変わらず高い。コロナウイルス対策は今も大変だが、スマホの活用というＩＣＴ関連のデジタル活用の促進にはとてもいい契機だったと思う。今後も継続して高齢者の生活に役立つデジタル活用を進めていく必要性がある。また、道草市に小学生が入っているというのは、どういう仕組みで小学生が参加する状況ができたのか伺いたい。
（吉田委員）
　道草市は地域の各種団体が共催しているイベントだが、その団体の中にまた明日という保育施設と高齢者の認知症のデイを兼ね備えた事業所がある。そこが地域の寄り合い所になっている。また明日に集まる子供たちが道草市の当日に来て協力してくれるのだが、また明日が子供たちに折り込みのチラシの協力を依頼したため、このたび子供たちと作業をすることに至った。その子達は地域包括って何という子供達ばかりだったので、地域包括支援センターとは、包括ニュースを出す意味とはなどを伝えながら、一緒に作業した。
（高良委員長）
　小学生だとか、高齢世代ではない方達と包括がつながっていることが、とても重要だと思う。先ほど、松村委員が話していた現役世代にどのように周知していくのか、集まってもらうのかという部分においても、団体を通してこれまでの既存の関係性をどう活用していくかが、１つのヒントにはなると思う。
　では、次はひがし包括の金子委員にお願いしたい。
（金子委員）
　昨年から継続しているお金の啓発活動は、各圏域の公民館やお元気サミットで市民の方に参加いただき、お隣さんカフェで行った朗読劇の啓発活動を行った。参加した方から自身の具体的なエピソードや行政に対しての意見を伺うことができ、理解を深めてもらえた感触がある。
　またコロナウイルス感染症が５類に移行したことに伴い、新規グループの立ち上げや活動を再開する団体が多数あった。さくら体操自主活動を新規に立ち上げるに当たり、第２層協議体の開催や助成事業の支援を行った。またＮＰＯ子育てサロンの方々とお散歩カフェを改めて開始する方向で、現在、調整相談を進めている。当施設のつきみの園の１室を使用し、将来的には多世代交流を目指している。
　他の活動としては既に第２層協議体で検討を重ねていたが、新たな取組に着手することとなり、地元商店街とタイアップし、町会や小学校、コミュニティースクールを巻き込んだまちの清掃、掃除を通して声をかけ合う地域づくりを目指す活動を展開していくこととなった。１回目は残念ながら雨天中止になり、運営委員会のみの実施となったが、全体的な方向性の検討や、共有を図る貴重な機会となっている。
　その他、当施設のつきみのサロンが活動再開でき、地域の方々とつくり上げる内容にリニューアルし、毎回好評をいただいている。また町会主体の活動も再開して、町会との連携も行っている。
　また、情報が行き届いていない、生活に係るちょっとした困り事がある、誰もが気

軽に立ち寄れる居場所がないなどの地域課題については、包括情報紙やＬＩＮＥでの情報発信を行ったところ、地域の方々から内容に関して好評いただき、登録した方々が周囲の方へ伝え広めてくれていると伺っている。
　最後に、活動団体の方から新規立ち上げや、サロン活動再開の相談から運営に関わる相談まで多岐にわたり声かけをもらっている。第２層コーディネーターとして支援をしているが、事案によっては所属のひがし包括全体で検討し、共有も行っている。引き続き地域課題に着目しつつ、地域の方々と顔が見え、気軽に相談、声かけができる関係を構築し、住み慣れた地域で暮らし続けることができる地域づくりを地域の方々と取り組んでいきたい。
（高良委員長）
　つきみのサロンが地域の方とつくり上げる内容にリニューアルしたというのは具体的にどういう意図で、どんなことをやっているのか。
（金子委員）
　つきみのサロンはもともとつきみの園のボランティアコーディネーターが主体で行っていた、サロンでは歌声喫茶のような内容で活動していたが、コロナになり規模を縮小して、色々なボランティアの方に参画してもらい、それぞれが持ち場をもちつつ自分の持っている情報を参加者に伝えていく形になった。中には大正琴を使った歌の場面もあり、腹話術を行って伝えていく場もあり、それぞれが特技や役割を持って行えるようにリニューアルした。
（高良委員長）
　それぞれの強みを生かす活動ができるのはすごくいいと思う。やはり一律のものをやっても受動的な活動になってしまい、参加している方の主体的な活動にならない場合が多いので、そう考えるとそれぞれの持っているものを出しながら役割を持つことによって主体的な活動ができると考える。ひがし包括でもＬＩＮＥでの発信を行っているのか。ちなみに小金井市の包括の認知度はどのくらいか。
（事務局）
　包括の認知度は６割くらいで、比較的高いと思われる。
（高良委員長）
　全国で見ると高いと思う。やはりこういう素晴らしい活動を日頃から行っているからこそだと思う。
　それでは、最後ににし包括からお願いしたい。
（久野委員）
　活動報告にも記載されているが、去年９月には市内の保育園と高齢者の交流会を企画し、けんこうサロンでボッチャを実施した。市内でボッチャの普及啓発活動をしている方が指導してくれ、子供にも高齢者にも分かりやすい説明で、双方すごく盛り上がって楽しく実施できた。次年度以降もいろいろと計画していこうと考えている。
　１１月には公民館、北町分館で主催された青少年教育講座で、学芸大学の院生他による芝居「さちどんどんを見て老後を考えよう」という題で市民向け講座に生活支援コーディネーターとして参加した。これは「助けてと言えたときが助かったとき」という考えのもと芝居の後にグループワークを行った。他人の悩み事を自分事のように発表し、どういった解決策について話し合った。参加者は２０代から８０代までの方で、年齢層の幅が広く様々な意見が出た。具体的に言うと、多分若い方の悩みだと思うが、結婚するか又はこのまま仕事を続けるかについてちょっと考えているという悩み事で、グループからいろいろな意見が出た。意見についてはいいとか悪いではな

く、いろいろな年齢層の方からの意見が聞けて、とても有意義だと感じた。先ほどの保育園児との交流でもそうだが、異世代の交流があると、閉じこもり予防とかいろいろなことで生かされてくると感じた。
　また、本町住宅の公園でラジオ体操を行っている団体があり、ラジオの音が聞こえづらくスムーズに体操が進まないことがあった、その際に若い男性からラジオデッキに頼らなくてもユーチューブとかを使ったほうがいいという話を主催者にしてたことがあり、やはりスマホを活用出来たほうがいいという話になった。そういった活動も踏まえて異世代交流の大切さを感じている。今、企画中だが若者との交流を視野に入れた形のスマホ活用講座を考えている。
（高良委員長）
　ボッチャを通して一緒に活動ができるものを行うのはすごくいいと思う。また、学芸大学や法政大学の小金井キャンパスも活用していただき、少しでも多世代のいろいろな方たちとの交流の場をつくっていくことができると思う。

（２）検討事項
　　高齢男性の社会参加の促進について

（高良委員長）
　続いて検討事項に移っていきたい。
　検討事項としては前回から高齢男性の社会参加の推進について検討を行ってきた。前回の第２回協議体では、あえてヒアリングをやりますという形ではなく、日頃の活動の中で高齢男性の方がどのような社会参加をしているのか、そのきっかけは何か、また社会参加ができていない要因はどんなことなのかを調べるという話になっていた。それに加えて吉田委員にはサロン連絡会を行う中で高齢男性の方の社会参加について住民主体の意見を頂けるような話合いをお願いしてあった。
　これについてどういう状況になっているのか、事務局から説明をお願いしたい。
（事務局）
　前回協議体からの進捗状況としてヒアリングについては資料４のとおり一定の情報がそろったと思われる。また令和５年度第１回生活支援事業協議体で示したアンケート結果に沿う結果が出たと考える。
　また資料５を見ていただくと、みなみ第２層協議体お互いを知るという議題で４つのサロン連絡会の関係をさらに掘り下げて話合いができたことがうかがえる。
　今後のみなみ圏域のサロン連絡会で一定以上の情報がそろったら、ヒアリングの結果と比較して、再度どのように進めるか検討していきたいと考える。
　以上を踏まえて、本日の検討事項としては資料４の左端側の内訳の上から３段目「どのようなしかけが必要か」までを参考に、４段目「その他ご意見」に入る仕掛けについて各委員からの意見をいただきたい。
　また市で既に行っている取組について資料６・７を説明した。
（高良委員長）
　みなみ包括の吉田委員から補足していただきたい。
（吉田委員）
　サロン連絡会については各サロンが横のつながりをつくって情報共有・課題共有することを総合的に行い、活動を活性化させる目的で開催している。また、男性の社会参加が少ないという課題については現在、連絡会内では顕在化した課題とはされてい

ない。相互の活動のよい点や違いを知って理解していく中で浮かび上がるものと考え、現在コーディネートを進めている。１２月１３日に行った連絡会では、らくらくサロンの男性リーダーが近隣のまち歩きイベントの企画の活動について話を聞くなど、男性が行う活動事例の共有を行った。また、サロンコスモスツーに参加する９２歳の男性ご自身からサロンに通うことにより情報が得られ、活動や考え方が広がり、心身ともに介護予防になっているという話があった。ちなみにこの方は２年前、９０歳のときに包括に相談に来て通いの場としてコスモスツーを紹介したが、そこからさくら体操や、前原小のラジオ体操会、老人クラブとつながり、また包括が開く認知症カフェにも欠かさず参加している。男性の社会参加による介護予防の好事例をその場で共有することもできた。今後のサロン連絡会としては相互の課題共有を進めて、互いに協力して活動を支え合える場となるよう、市とも連携してコーディネートしていきながら、男性の社会参加についても一つ一つ聞き取りをしながら、それも大事なことだねというテーマになっていくと考えている。

（高良委員長）

この９２歳の男性は、男性１人ということか。

（吉田委員）

コスモスツーには９２歳の男性が１人だけ、時々他の男性もくるが、この方は常に来ている。

この方は連れ合いを亡くし長く独り身でいる、親しい友人も入所してしまい、どこか自分のおしゃべり相手になりそうな方がいるところを教えてほしいと相談にきた。そこで世話好きの方たちがいっぱいいる通いの場を紹介した。もともとコスモスツーはさくら体操のリーダーが結集してできた団体で、そこからさくら体操に行き、さくら体操の集まりの場にラジオ体操によく通っている人たちやリーダーが参加するようになって、その後はそのラジオ体操に行くようになった。仲間が増えていくと老人クラブにも行くようになりどんどん輪が広がっていった。今、この方はしょっちゅうまちで出歩いている姿を見かける。

（高良委員長）

こういう方の経験談を発信するというか、この方がこのような流れで地域につながっていったと分かるような形での発信をしていく。もちろん個人情報の問題があるので、この方の了承があればだが。そういった意味では、好事例としてこんなこともできるんだと男性がイメージできる状況がつくれるかもしれない。

この後どういう仕掛けが必要なのかについて、議論をいただくことになると思うが、もう既に行っていることについて意見があったらお願いしたい。

まず応援ブックは男女比も入れるのと、その他にも非常に細かな情報を入れていく形で改善しているそうだが、応援ブックの新たなものが出来るは、今年度３月くらいか。

（事務局）

新しい応援ブックは２月末に納品される予定。

（高良委員長）

そうすると、実際にこれを使ってのリアクションはそれ以降だと思うが、現時点で意見等があればお願いしたい。別に高齢男性の社会参加の促進だけでなくても結構。

どうぞ、濱名委員、お願いしたい。

（濱名委員）

応援ブックはどのように一般の方々に配られるのか。

（事務局）
まず５００部ずつ各包括支援センターに配り、その他は公民館、図書館、第二庁舎１階、小金井まちづくり協会を経由してから配架できるところに配架する予定。
（濱名委員）
応援ブックの内容がどんなによくても届かない場合があると思う。周りの方にこんなものがあると言っても見るのが面倒くさい人もいるので、どのくらいの方に手に取ってもらえるかがすごく大事だと思う。書籍に関しては勧めてもなかなか難しいと思う。
（高良委員長）
実際に活用していくためにどういう周知や配布をして動機づけをしていくかは非常に重要な点だと思う。これについてはこれまでもいろいろと試行錯誤をしているところだと思うが、包括として５００部ずつ配分される状態で配布や周知について工夫している点や、むしろ今の課題として感じている点があればこちらで協議できればと思うがいかが。今のところちゃんとはけているのか、みんな割と持っていってくれているのか。
（吉田委員）
相談に来る方たちは自分で歩いて来る方も結構いる。そうすると地域の中で活動するところでは、介護保険のサービス以外としてこういったものもあるという提案の仕方をしている。
また最近のことだが、ケアマネージャーからの相談を受けて介護保険のサービスを幾つか紹介するが、その人に合ったものがなかなか見つからない中で、今度、新しく応援ブックができる旨を伝えると、２月末まで待っているという。それをまた提示して、その中から選択肢を増やすことができればと言っているので、ケアマネージャーにとっても１つの資源になっている。
（高良委員長）
本人もそうだが、支援しているケアマネージャーの手元に届くのは非常に重要なことだと思う。
（金子委員）
先ほど吉田委員も言っていたが、来所相談する方に配るのはもちろん、濱名委員が言っていたようにより広く多くの方に手に取っていただきたい。私たちだけではなく、身近な方たちからも広めてほしい。町会や関係機関には新しいものを配布し、手に取って中身を確認していただいた上で近くの方に口コミではないが、伝えていただく努力をしている。
（高良委員長）
その場合に５００部では足りないという状況は起きていないか。
（松村委員）
直接、渡すのは来所の方が中心になる。実態把握をするうえでいろいろな活動団体とつながっているため、その実態把握する先で欲しいという方に配布してしまうと５００部では到底足りない。そこは本当に工夫しながら代表の方中心に渡していくとか、そういう形を取らざるを得ない。
ただ、私の実感としては包括に相談に来て活動先を紹介する場合に、やはり包括に来る時点で介護保険も視野に入れつつ案内をする。そういう方にとってはちょっと情報量が多過ぎて、自分で根気よく見るのはなかなか難しいと思う。結局私どもでアセスメントして活動先を紹介して、さらに心配だなという方については初回の訪問のア

ポまで取って一緒に出向くところまで支援しないとなかなかつながらないという印象である。これが８０代９０代になってくると、応援ブックを何度紹介しても初めて見る感じになり、多分家に何冊かある方もいる。そういう状態なのでなかなか難しいと思う。
（高良委員長）
応援ブックを持っていっても、実際にそれで動くのがまた難しい状況があると同時に、やはりこの５００部でも足りないという状況もあるかと思うが、これはネット上でデータは出しているのか。
（事務局）
ＨＰに掲載している。
（高良委員長）
ネット上で出しているが、自分で検索できるような形ではなく、ＰＤＦでただ表示されるというだけか。これが検索できるようになるといいのだが。高齢者の方もスマホが使えるようになってくると、自分でキーワードを入れて検索できるようになり、検索をするとすぐ出てくるようにできると、活動先を紹介するときにも楽だと思う。
濱名委員はよろしいか、このような形でかなり活発に配布しているようだ。
（事務局）
介護予防講座は一般の参加者を募集しており、社会参加の大切さを説明することから、毎回参加者に応援ブックを配布している。その講座は年３回開催しているので、その講座だけでも９０人近くには配布できている。
また、介護福祉課で開催するその他の講座でも随時参加者に配布しており、医療機関には認知症担当が配布している。各包括支援センターからケアマネに渡してもらえるようお願いしている。そういういろいろな形で広く配布は行っていると思う。
また各包括５００部で足りないという声があったが、足りなければ声をかけてもらえれば追加で渡すこともできる。これは今までも行ってきたし、ひがし包括の金子委員からは、コロナ前に５０部、１００部ほしいとその都度声かけをもらっている。今後も声をかけてくれれば追加で渡せる準備はある。
（高良委員長）
では、松村委員、足りない場合は追加出来るとのことなので。
（松村委員）
そうはいっても。
（高良委員長）
在庫の情報共有等も連絡会で測りながら、効果的に配布していただきたい。
実際の動きについては、男性高齢者、単身高齢者の方が社会参加していく仕掛けと同じことだと思われる。あと一歩背中を押すのをどうすればいいのかも検討しなければいけない。
では続いて、プレシニア・シニアのための社会参加説明会について、これは今まで何回くらい開催しているのか。
（事務局）
今年度初めて行った。
（高良委員長）
このプレシニア・シニアのための社会参加説明会の申込みの内訳を教えてほしい。
（事務局）
スマホサポーター養成講座と活き生きボラポの申し込みをした方が同じ方になる。

なので参加者４名のうち３名が何かしら申込みをしたという結果になる。
（高良委員長）
　これは男女関係なく募集したのか、その中で男性ばかりになったという要因は何があると思うか。
（事務局）
　それは分からない。
（高良委員長）
　では、この社会参加説明会について意見等があったらお願いしたい。
（石塚副委員長）
　今回２０名募集して申込みが５名で、実際の参加者は４名であったが、この会を開催した規模感としては２０名の募集で２０名に来てほしかったのか、２０名で募集したけれども、実際には４名で逆にちょうどよかったのか。実際に今回開催した結果の中での感想を教えていただきたい。
（事務局）
　感想としては、少人数だったからこそ本当に座談会みたいに机を囲んで話が出来たのですごくコミュニケーションが取りやすかった。最後に参加者に感想を聞いてみたところ、こういう講座なら出来そうだという声もあった。また、参加者が少ない分、説明する事業担当者と参加者が同じ人数という状況で、こんなに人を使っていいのだろうかという思いはあった。結果、参加者が少ないなりによかった部分もあると感じた。今後としては１回で開催するのか、少人数で複数回開催していくのがいいのか、検討の余地はあると感じる。
（高良委員長）
　こういう会は説明や、情報提供するという意味での意義はあるが、参加する方々で交流することによってそこでのつながりをどこにどうつなげるのか、この機会をどうしていくのかも非常に重要だと思うので、多分その辺が規模感とも関連してくると思う。その辺りも含めてまた検討していただきたい。
　他に何かあるか。
　また来年度に開催しての振り返りをもって、高齢男性の方の活動につなげていくという方法も、１つのやり方としては、やってみる価値があると思う。
　それでは続いて、資料４聞き取り結果「どのようなしかけが必要か」ということで、いろいろな意見をいただいているが、これらを踏まえてその他にどんな仕掛けが必要かという意見をざっくばらんにいただきたい。
　では、石塚委員からどうぞ。
（石塚副委員長）
　まず②楽しく活動に参加してもらう、あともう一つは仕掛けをあまりにも複雑に考え過ぎて、継続できなくなる問題も併せて考えなくてはいけない。無理して継続できない活動を企画すると負担になるので、そこはバランスをしっかり考えていく必要がある。
　既にここまで考えてきて果たしてこの他に何があるのか、非常に難しい気がする。参加したい男性は参加するし、参加することはあまり考えていないけれども、何か困り事が生じてどこかに相談してくると、その人をつなぐことがある程度できる。問題は、困り事もなく、参加することを考えていない予備軍の方たちを、どのようにつないでいけるかという話になってくる。そうするとそこら辺の方たちがターゲットになってくると思う。普段なかなか包括や社協でも、実際かかわらない方、困り事も何も

ないし、かといって何も活動していない人たちなので、そこら辺の方にどうやって啓発していくか。市報も関心がないから見ないし、応援ブックも仮に目の前に置いてあっても読まない。そうすると１つ考えられるのは、この年齢に至る前までに働いていたとしても地域と何らかの形でつながっていられるような環境をどうつくるかということになる。ただ、それはすごく難しい話で、皆さんやりましょうと声かけして一朝一夕にできることでもない。あとは誰もが共通して関心を寄せるものに引きつけて、例えば防災とか災害とか、そういったものに興味・関心を持って寄ってきた方を引っ張り込む形になると思うが、それも大変かなと思う。

以上です。

（高良委員長）

石塚委員から類型化して話をいただいたので、とても分かりやすかったと思うが、今、作成している応援ブックや実施している説明会は、自ら社会参加に対して関心がある方がある程度ターゲットになっている。

一方で、困り事があって相談に来た方は応援ブックを渡して、もう一歩一緒に伴走支援する中で社会参加につながるという状況があり、そこを充実させていくのも１つの方法だと思う。そこがマジョリティになればそれだけ予防ができるので、それは継続していかなければいけない。

さらに、石塚委員が言うように関心のない人たちは男性に限らず、どう周知していくのか、動機づけしていくかが非常に難しいと思う。１つは日頃から言われているように、誰もが関係してくる防災訓練などに参加してもらうように声かけして、そこから社会参加につなげていくやり方もあるし、それと同時に自身の関心のあることなら１人でも動くと思われる。女性は他の方とのつながりの中から動くことが多いが、男性は興味・関心がある事柄からで動くことがある気がする。そういった意味では通いの場とのマッチングをさせる方法をもっとつくっていく必要性があると考える。

三鷹市でいきいきプラスの活動を行っていて、仕事が中心のようだが、例えば「参加者を募集、協力してください」、「パソコンを自宅で教えてください」とか、「高齢者宅での家事や病院の付添いをしてください」というような依頼に対して仕事を請け負うというような要はマッチング事業である。あとこれをＩＣＴでやるべきだと思うが、その辺が東京都で人生１００年時代における社会参加施策に係る検討会を昨年度やっていて、昨年度の報告書にいろいろな活動が載っているので、その辺りも参考にしてほしい。今、八王子市がネットやスマホとかを使ってマッチングを行っている。福井県が生協でネットを介してマッチングサービスを行っているらしい。小金井市もこういうことを考えていく必要性があるのではないかという気がする。

これはちょっと古いが東大でやっているＧＢＥＲというアプリがあるようだが、このアプリでマッチングされる。他のところでもマッチングするアプリはいっぱいあり、仕事のマッチングアプリは山のようにある。ただ仕事だけではなくて、趣味とかボランティアとか仕事とか生涯学習とかいろいろなことも一緒に表示できることがポイントになる。そういったところをもう少しリサーチして参考にしながら、特にアプリのようなものを使っていく必要性がある気がする。ちょうどスマホに関しては随分と活用できる高齢者が増えているし、そういう中から男性の方もちょっと社会参加・地域参加してみようか、もっと知りたいなどで、地域とつながる可能性が高いと思われるので、その辺りも含めて検討いただきたい。その他、自治体ワークスウェブに八王子市や愛媛県松山市のアプリを活用したマッチング事業を行っている記事が載っていた。この辺りもちょっと参考にして動くといいと思う。

でも、やはりそれでも背中を押すとか、ここにつなげるとか、そういうことはやっていかなければいけないと思う。他にも意見をいただきたい。
田部井委員、いかがですか。
（田部井委員）
相談に来る方は何かしら課題や悩みを抱えている方が多い、その中で単身高齢の男性のことを思い浮かべると、やはり病気や悩みを抱えていても何か役に立ちたいとか、何か自分にできることがないか、居場所が欲しいとか、どこに行けばいいのかなどの話を伺う。先ほど、委員長から話があったが役に立ちたいという意欲はとてもあると感じる。ボランティアとか趣味とか、仕事だけではない何かマッチングできる機能があればとてもいいと思う。
あと、男性が参加しやすいということについては、目的があると集まりやすいと感じるので、この辺も生かしていけたらと思う。
（高良委員長）
思いは必ず皆さん持っていると思うので、それをちゃんと適切な場所につなげるにはどうすればいいのかを考える。そのために包括に相談に来る場合にはそれこそ包括の方のような専門職が話をしてアセスメントをすることによって、その人に合った支援ができるのだが、それを全部の方に行うのは不可能だし、かつ相談に来なければ支援につながらないのだから、できれば主体的に自分から探せるように、または、何かに関心のある方はその目的の活動を探す何らかの環境を整える必要がある。そういう思いが少しでも実際の活動につなげられるような環境整備をするために、マッチング機能が求められていると思う。
出川委員、いかがか。
（出川委員）
話を伺って本当にそのとおりで、難しさを改めて感じる。皆さんの気持ちを点とすると、その点と点をどうつなげればきっかけができるのかといつも思っている。
質問だが、先ほどの集まりの４名の中にプレと言われる年代はいたのか。
（事務局）
１名８０代の方がいたが、それ以外は割と若い方が参加していた。
（出川委員）
ケアマネージャーで関わっているときに、シルバー人材センターで働きたい方がいて、反対に頼みたい高齢者がいる。頼む側は高齢者に家具を動かしてもらうのは何か悪い気がする、お掃除を頼めないなどの声を聞くことがある。どうしてもシニアというイメージがあると思う。また、マッチング機能があると介護保険で補えないようなところでそういうサービスがあるといいなと常に思う、時間がかかるかもしれないが、マッチング機能を使う人が広がって、長い目で働きかけていく方法はいいと思った。
（高良委員長）
シルバーの方に仕事を頼みにくい方もいる。
（出川委員）
高齢の方に仕事は頼みにくいという声はよく聞く。
（高良委員長）
そういう感覚があり、それが活動や利用の阻害要因になっていることがある。
濱名委員、何か意見があればお願いしたい。
（濱名委員）

さくら体操をやっていて１人男性がたまに参加するが、その方は多分主治医の先生や、かかりつけの先生に勧められて来ているようだ。毎回は続かないが、時々ちょっと顔を見せるような感じで参加している。やはり信頼している人から一言声をかけてもらうと、ちょっとその気になるのかなと思った。
（高良委員長）
それはすごく重要なポイントで、男性の方はある程度信頼しているとか、自分よりも偉いではないが、そういう方から言われた事に関して従うみたいなところがある。そう考えると、地域の医療関係者の方にお願いするのも１つではないかと思う。地域参加が必要そうな男性がいたら一言声をかけてもらうとか、応援ブックも配架依頼を医療機関にするのもいいかもしれない。
村越委員、何か。
（村越委員）
若い人でも自分から声をかける人と誘われれば行くという受け身の人もいる。高齢者にしてみても誘われれば行ってもいいと思うかもしれないし、１回嫌々でも行ってみて、だんだん興味が出てくる場合もあると思う。それと男性は、これについて教えてほしいと頼られるとやってもいいかなという面もあると思うので、今あるサークルのお友達とかにそういう感じで女性からお願いするのもいいと思う。近くにいる方に少しずつ声をかけていくのも大切だと感じる。
（高良委員長）
お願いするのはとてもいいと思う。
では、久野委員からお願いしたい。
（久野委員）
恐らく普通のＤＶＤとかレンタルできるものとかユーチューブとかでしか見られない、簡単に手に入らない映像や、そういったものを活用した企画があると出不精な人も、もしかしたら地域に出てくるかもしれないと思った。簡単に手に入らないような情報共有の場やそういった企画をしたりするといいかなと感じた。
（高良委員長）
その考えもすごい、何があるだろうか。
（久野委員）
多分昔の映画なのか。本当に古すぎて全然音声とかちゃんと出ていない、見られないようなものとか、貴重な映画など特殊なものでつるとか。
（高良委員長）
そういうのはあまりにもマニアックだとまた難しいところはあるが、なにか懐かしいなみたいな形で、でもなかなか見る機会がない、その辺のうまいところを突いていくのが難しそうだが。いい考えだと思う。
金子委員、いかがか。
（金子委員）
例えば６０歳とか６５歳くらいになったら地域デビューの推進を広く周知していく、そこについては何かしら市からの便りに併せて送り、目にする機会を増やしていく。その土壌がある中でいろいろな仕掛けをつくっていくと、より効果的ではないかと思う。
（高良委員長）
早め早めに対応するべきなのだが、この周知の方法をどうするのかがまた１つの課題である。若い人たちが市報を見るかというと、多分見ない。だからどういう形で発

信していけば届くのか、本当は企業と連携できればいいと思う。もう大企業では退職後の手続や、退職後のライフプランを立てることや、その後の生活について考えることを勧めてる。大企業は実施しているが中小企業は行っていないところが多いので、その中小企業と連携して、市主催で今後の老後はこうなる等の情報提供をしていきながら、参加者が書き込みできるワークシートをつくって、一緒にライフプランを立てながら退職後の地域参加の必要性を伝えていくことができると思う。実際にやるには中小企業の方たちとの交流や関係性をつくっていき、さらに人材が必要になるなどなかなか難しい。
ただ言っていたように、周知は大切だと考える。
　では、松村委員からもよろしいか。
（松村委員）
　大企業の方向けのそうした教育は進んでいるが、中小企業や自営業の方に向けてのそうした啓発活動は市がやるべきだと思う。きた包括もそういう視点から現役世代とつながることを目指しているが、なかなか周知ができないので、市が一斉に送る案内に掲のせることができるといいと思う。
　それとは別に、この世代の方は一家の柱であるという意識が強いので、資産を守ることや家を守ることが自分の役割と感じている方が多い。防災に加えてこの世代に共通する関心の高いテーマで行う講座や、町会の活性化につなげるべくうまく連携して男性の興味につながりそうな団体とともに、発信することができればと思う。
（高良委員長）
　防犯と相続などのキーワードが出た。他の団体や部署とうまく連動させながら、そこに参加している方たちに対して何かを発信して、その後にその方達がつながれるような方策を取っていくことは、同じ市の立場なら連絡・連携しやすいと思うので、このようなことも考えていく必要があると思う。
　では、吉田委員、お願いしたい。
（吉田委員）
　今の話に加えて２つあると感じている。５０代とか６０代のシニア層に対しての企画は興味関心のあるテーマを中心に他の担当課と協力して情報発信を行い、その後のシニアライフプランを啓発するような場を共催できればいいと思う。あともう一つ、目的や役割というところでは、割と自治会や老人クラブに男性のリーダーが多いので、そういった団体と協力しながら各団体の目的や役割を周知していく。また、応援ブックやその他の方法で自分達が男性活動・活躍の場を見える化していくと参加しやすくなると感じた。その際、ただ活動を紹介するのではなく、活動団体の目的や役割について丁寧に説明することで、何かどこかで活動したいと考えている方の選択肢が広がるような形を取っていきたい。
（高良委員長）
　この活動先を紹介することとしては包括の新聞やＬＩＮＥなどで周知しているのか、他の方法で広報することはあるか。
（吉田委員）
　毎回取材のために時間を割くことはできないが、訪問して、活動を見て、写真を撮って、応援ブックよりももう少し活動内容を深く包括ニュースに時々は掲載することはある。そういった方法でもう少し男性の参加しやすい活動先をピックアップして掲載するのも一つの方法だと考えている。
（高良委員長）

活動先の様子が何となく分かるような写真や、動画で、もちろん個人情報についての了承をいただいたうえだが、活動先の雰囲気が分かるともっと行きやすい感覚が出てくると思われる。
いろいろな意見が出てきたので、これを参考に次の協議体まで活動を進めていただきたい。
中でもみなみ圏域の連絡会についてはモデル的に行うことになっているので、今日の皆さんの意見の視点も入れ込みながら進めてほしい。その後の連絡会の進捗状況や、それぞれの包括でも町会等との計画があると思うので、それらを進めていただき特に男性の高齢者についても注目して、次回の協議体でまた報告いただきたい。それらの報告を踏まえてさらにどういう活動が必要なのか、もしくはどういう形で進めるのか検討していければと思う。
また、市としてどうしていくのか、今日の話し合いの中でいろいろな情報があったと思うので、整理して考えをまとめてほしい。
（平岡高齢福祉担当課長）
市の介護保険計画第９期の策定について、生活支援について重点取組として位置づけたことを伝え、皆さんの日頃の取組や地域の方や行政や市民団体が連携して地域課題に取り組んでいることが本市の強みであることを説明した。
（高良委員長）
皆様方の継続的な活動がしっかりと評価された結果だと思う、今後もそういった計画をしっかり現実のものとしてやっていければと思う。

３　その他
次回協議体の開催予定

４　閉会